だけで、 三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家庄ミうたぎできた場合である。年中借金取が出はいりした。 いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、 一向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、 水洟の落ちたのも気付かなかった。 たに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかい。 だい はない かんじょく はい ない はいり した いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地屋、油屋、八百屋、鰯屋、出出いりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、 今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる

ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それで 吉とは大分違って、 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともい T

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。それで、と、きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 母親を欺して買食いの金をせ

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ

醬油代がはいっていないと知れた。 銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた もすこぶる厚身で、お辰の目にも引き合わぬと見えたが、 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻で めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、 しめたり、 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 ちょっと後悔された。 父親の算盤には炭代や 種吉の天

夏祭には、 よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出通り掛りに見て、種吉は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。がりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節が 天婦羅だけでは立ち行 水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、 かぬから、 近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。 お辰は存分に材料を節約したから、 日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あ 祭の日 氏神 0

件で女中奉公させた。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこのゆくゆくは妾にしろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、 河童は材木屋だと蔭口きかれていたが、 土地を材木屋の先代が買い取って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、 の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、 蝶子はむくむく 女めいて、 顔立ちも小ぢんまり整い、 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるら 材木屋はさすがに炯眼だった。 した。 俗に、 河産横

> しっぽり明朝 R

三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家主そのたぎゃ年中借金取が出はいりした。 だけで、 だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今号 たに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんから、だいまな。鰯、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、そにときが、「ままで、「ないではない。」では、 いまれる厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地屋、油屋、八百屋、鰯屋、出出いりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、

よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それで 吉とは大分違って、 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚いて きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともい

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 もすこぶる厚身で、お辰の目にも引き合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻で しめたり、 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 ちょっと後悔された。 種吉の天

よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出した。通り掛りに見て、種吉は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。がりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したがりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約した 天婦羅だけでは立ち行かぬから、 水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、 近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。 お辰は存分に材料を節約したから、 日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あ 祭の日 氏神 Ö

河童は材木屋だと蔭口きかれていたが、 件で女中奉公させた。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこのゆくゆくは妾にしろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、 土地を材木屋の先代が買い取って、 この材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、 女めいて、 借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、 顔立ちも小ぢんまり整い、 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるら 材木屋はさすがに炯眼だった。

夫婦善哉

005

しっぽり明朝 M

しっぽり明朝 M

だけで、 三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家主そのたぎゃ年中借金取が出はいりした。 いナーと待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる下向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかニッチューチャー だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今号 ク地、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋゙節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、鰯屋、

よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それ 吉とは大分違って、 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 で

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二二度押問答のあげく、結 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚い きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 一度だけだが、 板の間のことをその場で指摘されると、何ともい いて

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻で もすこぶる厚身で、 しめたり、天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 ちょっと後悔された。 種吉の天

天婦羅だけでは立ち行かぬから、 水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、 近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。 お辰は存分に材料を節約したから、 日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あ 祭の日 氏神 Ö

河童は材木屋だと蔭口きかれていたが、 件で女中奉公させた。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこのゆくゆくは妾にしろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、 町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、 土地を材木屋の先代が買い取って、 蝶子はむくむく女めいて、 借家を建て、 顔立ちも小ぢんまり整い、 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるら 今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、 材木屋はさすがに炯眼だった。 俗に、

007

夫婦善哉

しっぽり明朝 SB

よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それ 吉とは大分違って、 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 で

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね。 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚いて きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともい

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻で 醬油代がはいっていないと知れた。 もすこぶる厚身で、 しめたり、天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 ちょっと後悔された。 種吉の天

天婦羅だけでは立ち行かぬから、 水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、 近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。 お辰は存分に材料を節約したから、 日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あ 祭の日 氏神の

河童は材木屋だと蔭口きかれていたが、 件で女中奉公させた。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこのゆくゆくは妾にしろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、 町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、 土地を材木屋の先代が買い取って、 蝶子はむくむく女めいて、 借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、 顔立ちも小ぢんまり整い、 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるら 材木屋はさすがに炯眼だった。 俗に、

009

夫婦善哉

しっぽり明朝

В

三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家主そりなどのや年中借金取が出はいりした。 だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやるいナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる下向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんか 蒟蒻、 

よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それ 吉とは大分違って、 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 で

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね。 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚いて きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともい

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻で もすこぶる厚身で、 しめたり、天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 ちょっと後悔された。 種吉の天

よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出した。通り掛りに見て、種吉は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。がたみ、サッザがりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したがりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約した 天婦羅だけでは立ち行かぬから、 水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、 近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。 お辰は存分に材料を節約したから、 日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あ 祭の日 氏神の

河童は材木屋だと蔭口きかれていたが、 件で女中奉公させた。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこのゆくゆくは妾にしろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、 町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、 土地を材木屋の先代が買い取って、 蝶子はむくむく女めいて、 借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、 顔立ちも小ぢんまり整い、 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるら 材木屋はさすがに炯眼だった。 俗に、

夫婦善哉

Е

だけで、 三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家庄とうたぶっゃ年中借金取が出はいりした。 いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、 一向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、 水洟の落ちたのも気付かなかった。 たに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかい。 だい はない かん はない かんしょう はい かん はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、は出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、 今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる

吉とは大分違って、 よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それで 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結 そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。それと、きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともい T

それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 もすこぶる厚身で、お辰の目にも引き合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻で 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 ちょっと後悔された。 種吉の天

よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出通り掛りに見て、種吉は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。がりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節が 天婦羅だけでは立ち行 水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、 かぬから、 近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。 お辰は存分に材料を節約したから、 日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あ 祭の日

件で女中奉公させた。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこのゆくゆくは妾にしろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、 河童は材木屋だと蔭口きかれていたが、 土地を材木屋の先代が買い取って、借家を建て、 の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、 顔立ちも小ぢんまり整い、 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるら 今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、 材木屋はさすがに炯眼だった。

013

夫婦善哉

だけで、 三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家主そのたぎゃ年中借金取が出はいりした。 だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今号 ナーと待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかい黄、黄素、希々原は「生」 かに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんか紅 生姜、鯣、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、紅 生姜、鯣、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地屋、油屋、八百屋、鰯屋、が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、やぁや、よりや

よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それで 吉とは大分違って、 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚いて きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともい

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 もすこぶる厚身で、お辰の目にも引き合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻で しめたり、天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 ちょっと後悔された。 種吉の天

よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出した。通り掛りに見て、種吉は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。がりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したがりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約した 天婦羅だけでは立ち行かぬから、 水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、 近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。 お辰は存分に材料を節約したから、 日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あ 祭の日

件で女中奉公させた。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこのゆくゆくは妾にしろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、 河童は材木屋だと蔭口きかれていたが、 町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、 土地を材木屋の先代が買い取って、 借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、 顔立ちも小ぢんまり整い、 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるら 材木屋はさすがに炯眼だった。

夫婦善哉

015

三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家主そのタネッラ゚ャ。 年中借金取が出はいりした。 だけで、 いナーと待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる下向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかニッチューチャー だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今9 ク地、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、鰯屋、

よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それ 吉とは大分違って、 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 で

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二二度押問答のあげく、結 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚い きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともい いて

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻で もすこぶる厚身で、 しめたり、天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 ちょっと後悔された。 種吉の天

天婦羅だけでは立ち行かぬから、 水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、 近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。 お辰は存分に材料を節約したから、 日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あ 祭の日 氏神の

件で女中奉公させた。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこのゆくゆくは妾にしろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、 河童は材木屋だと蔭口きかれていたが、 町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、 土地を材木屋の先代が買い取って、 蝶子はむくむく女めいて、 借家を建て、 顔立ちも小ぢんまり整い、 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるら 今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、 材木屋はさすがに炯眼だった。

017

夫婦善哉

しっぽり明朝B1 SB

しっぽり明朝B1 SB

三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家主そり年中借金取が出はいりした。 だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやるいナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる下向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんか 

よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それ 吉とは大分違って、 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 で

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚いて きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともい

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻で 醬油代がはいっていないと知れた。 もすこぶる厚身で、 しめたり、天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、ちょっと後悔された。 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 種吉の天

よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出した。俗に、通り掛りに見て、種吉は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。がたみ せまかりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、がりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、 天婦羅だけでは立ち行かぬから、 水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、 近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。 日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あ 祭の日 氏神の

河童は材木屋だと蔭口きかれていたが、 件で女中奉公させた。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこのゆくゆくは妾にしろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、 町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、 土地を材木屋の先代が買い取って、 蝶子はむくむく女めいて、 借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、 顔立ちも小ぢんまり整い、 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるら 材木屋はさすがに炯眼だった。

019

夫婦善哉

しっぽり明朝 B1

しっぽり明朝B1 B

三ツ葉、蒟蒻、紅 生姜、鯣、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、三ツ葉、蒟蒻、紅 生姜、鯣、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、乾が屋、炭屋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地屋、油屋、八百屋、鰯屋、年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、水油を、いごで だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやるいナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる下向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんか

よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それ 吉とは大分違って、 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 で

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね。 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚いて きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともい

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻で 醬油代がはいっていないと知れた。 もすこぶる厚身で、 しめたり、天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、ちょっと後悔された。 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 種吉の天

天婦羅だけでは立ち行かぬから、 水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、 近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。 日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あ 祭の日 氏神の

河童は材木屋だと蔭口きかれていたが、 件で女中奉公させた。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこのゆくゆくは妾にしろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、 町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、 土地を材木屋の先代が買い取って、 蝶子はむくむく女めいて、 借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、 顔立ちも小ぢんまり整い、 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるら 材木屋はさすがに炯眼だった。

Е